

木曾願書

シテ 木曾義仲

立衆 徒兵

トモ 立衆中の一人

ヲカシ 里人

ツレ 覚明

ワキ 今井兼平

地は 越中

季は 夏

一 声立衆 「八百万代を治むなる。弓矢の道こそ久しけれ。

シテ 「抑是は。木曾義仲とは我事なり。

立衆 「さても平家は越前の。燧が城を攻め落し。都合其勢十万余騎。此砥並山まで攻め下る。

シテ 「こゝには源氏。

立衆 「かしこに平家。両陣相さゝへ。龍虎の威をふるひ。
獅子象の勢。帝釈修羅の思ひをなし。

上歌 「日月も手の内に。く。とりぐなれや梓弓の。

矢叫びは雲にひゞき。鬨の声は俱梨伽羅の。谷風
も烈しく。山河草木も震動す。されども味方の
計略。明日の合戦と触れければ。敵味方に矢をとゞ
め。くつばみを返し砥並山。明くる空をぞ待ちかる
たる。く。

シテ 詞 「如何に誰がある。

トモ 「御前に候。

シテ 「あの茂みの中に。新しき社壇の見えたるは。如何

なる神を勧請申したるぞ尋ね來り候へ。

トモ
「畏つて候。如何に在所の人の渡り候ふか。

ヲカシ
「何事にて御座候ふぞ。

トモ
「あれに新しき社壇の見えて候ふは。如何なる神を
勧請申してあるぞ。

ヲカシ

「さん候始めて八幡を勧請申して候。今八幡とも又

在所を羽生と申すにより。羽生の八幡とも申し候。

トモ
「如何に申し上げ候。在所の者に尋ね申して候へば。

新しく八幡を勧請申して候ふが。今八幡とも申し。

又羽生の八幡とも申すよしを申し候。

シテ

「近頃めでたき事にて候。やがて社参申さうするにて候。覚明を召して願書をこめ候へ。

トモ
「畏つて候。如何に覚明御参り候へ。急ぎ願書を書きて御こめあれとの御諱にて候。

覚明
「畏つて候。やがて仕らうずるにて候。

サシ立衆
「今井樋口を始めとして。其数多き兵ども。皆悦び

の色をなして。

「急ぎ社壇に参りつゝ。く。信心を致し取り分きて。願書を読み上げ。猶神徳を仰がん。

シテ
「何々歸命頂礼。八幡大菩薩は。日域朝廷の本主。累世明君の曩祖たり。

地
「宝祚を守らんが為め。蒼生を利せんが為めに。三

身の金容を顯はして。三所の權扉を押し開き給へり。こゝに頻の年よりこのかた。平相国といふ者

あつて。四海を掌にし。万民を惱乱せしむ。是れ

仏法の怨み王法の敵なり。抑曾祖父前の陸奥守。

名を宗廟の氏族に帰附す。義仲いやしくも。其後

胤として此大功を起すこと。喻へば嬰児の蠹を以て巨海を測り。蠟螂が斧を取つて。隆車に向ふ如くなり。然れども君の為め國の為めに。是を起すのみなり。伏して願はくは。神明納受垂れ給ひ。

勝軍を究めつゝ。仇を四方に退け給へ。寿永二年

五月日と。高らかに読み上ぐれば。

シテ

「義仲願書に鏑矢を。神前に捧げ申せば。御供の兵どもゝ。上差の鏑を一つづゝ。彼宝前に捧げて。南無帰命頂礼。八幡大菩薩とて。皆礼拝を参らする。一声ワキ「寄せかくる。汀の波のおのづから。音も烈しき朝嵐。

詞
「如何に平家の軍兵たしかに聞け。抑是は木曾殿の御内に。今井の四郎兼平。今日追手の大将と名乗り呼ばゝる其声は。天地も響くばかりなり。
地
「今井が合図の鬨の声に。後の林の五万余騎。一度に鬨をどつと作る。

地
「平家は其勢十万余騎。く。時もこそあれ五月闇。暗さは暗し巖石巖の。敵も味方も同士討すなど。魚鱗鶴翼定めもなし。

シテ
「かりける処に。

地
「かりける処に。羽生の八幡の社壇の上より。神

火一村飛び上つて。源氏の軍兵の闇を照らす。光の影をよくく見れば。鳩鳥を戴く忍辱の御鎧。悪魔降伏の白羽の鏑矢を。平家の陣に射給ふと見えしが。平家の大勢取る物も取りあへず。俱梨伽羅が谷の。巖石の上に走りかゝり。落ち重なりく。馬には人々には馬。雪のしづえや霜くづれ。積る木の葉の塵ひぢの如く。七万余騎は俱梨伽羅の。谷の千尋の深きをも。浅くなる程埋めたりけり。